

— 1 —
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は、近年になって急速に生活スタイルを「サル型」へと、変化させている。だが、退化しているのは、生活の形態にとどまらない。

コミュニケーションの仕方、質が劣化しつつある。ことばを用いながらも、実は言語本来の使用の方法からはずれた、サルのスタイルへと先祖返りしつつある。

こう書くと、そんなバカなと思われるかもしれない。サルのようにコミュニケーションをはかっているといっても、ちゃんとことばを使っておしゃべりしているではないか、サルのように「キャー」とか「ワー」とか意味不明の雄たけびを出しているばかりでない、と。

だが話はそうタンジューン^aではない。なるほど人間は、あくまでも言語を使って会話しているわけで、サルとは異なる。しかし、それだけで「言語的」な意思疎通[※]をしているといいきれるかという、そうとは限らない。

例えば、「電話」と子どもが親にいった場面^bをソウテイしてみよう。これは、立派な一語文である。ただし、その意味はさまざまに解釈可能だ。「電話に出て」「電話をかけて」といった、話し相手への要求とも取れる。他方、「今電話で話している最中である」という叙述文としても、理解することができよう。では、どちらが正しいのか？

それは、「電話」という字面^{じづ}からでは判別できない。ふつう私たちは、発話の意味を把握しようとする際、言語の情報を手がかりに、推論によって相手が何を伝えたいのかを推しはかるのである。「で・ん・わ」という音

の組み合わせ以外の手がかりとして、イントネーションや声の調子、また音声要素だけにとどまらず、顔の表情やジェスチャー、今、話がなされた場の状況などの要因を斟酌[※]する。加えて、過去の記憶から話し相手に関する知識なども引き出して、a 的に相手が何を伝えたかったのかを判断するのである。

これは、いわれてみれば当たり前のことに違いない。しかし一般に言語というのは、たいへんシンボリック性の高い記号であるとみなされている。ひつきよう言語的コミュニケーションというのは、記号性の高い情報の伝達手段と受けとめられがちであるが、その記号の指示する意味の適切な解釈を支えているのは、全然b 的でないソクメンなのである。

それどころか、記号を字義通り記号として解読することは、およそ非c 的な意味理解であることが、最近の研究から明らかにされつつある。① というのも、人間以外の霊長類の行う音声コミュニケーションこそ、まさにそれにあたるからにはかならない。

サルにおいても、人間の言語体系における単語のようなものの存在は決して珍しくない。人間に系統的にもっとも近い霊長類というと、チンパンジーに代表される類人猿であることは周知の通りである。逆に霊長類としてd 的にいちばん下等なのは、原猿と総称されている。マダガスカルに生息しているキツネザルがテンケイとして、よく知られているよう。

【1】、そのキツネザルにすら、②「ことば」もどきは存在する。【2】彼らの天敵にあたるような捕食動物が近づいてきた場面を思い描いてみよう。そういうとき彼らはドクトクの声を出す。この声を耳にすると、周辺にいる仲間（同種個体）はただちに自らの身を守る防御反応を行う。結果としてムレに危険の接近を周知する

機能を実行しているところから警戒音とメイメイhされている。ただし、天敵の種類はさまざまである。大別iしても、空からやって来るものと、地表から来るものがある。それによって防御の手段の講じ方2も、おのずと異なってくる。空からの場合は、地表近くへ身を伏せた方がよい。だが、もし地表から危険が迫せまってきているのに、空からのときのように逃避とうひを企くわてると、とんでもないことになる。

そこで淘汰たうた圧が働き、キツネザルは複数のタイプの警戒音を出すにいたったのだった。例えばAとBという二種類の声が存在するでしょう。空から捕食動物がやってくるとAの声を出す。【3】、聞いた仲間は地表へ逃にげる。他方、地表から敵が来るとBの声を出す。その際は、仲間は木の上へと逃のがれる。

AもBも、警戒警報である。ただしAは空からの危険、Bは下からの危険を意味している。これは、ほとんど単語による表現に近い。そういう観点では、彼らも記号的コミュニケーションを行っていることになる。

【4】、彼らの方が人間よりも、ゲンミツに仲間の発する音声おとこゑを記号的にとらえているのである。ヨーロッパの昔話で、いつもいつも「狼おおかみが来た」とウソを村人に伝えて驚おどろかせては喜んでいた少年の物語というのをご存知だろう。村人たちは、はじめは信じこんでびっくりしていたが、そのうち誰だれも信じなくなった。Aの

はてに、本当に狼が来ても誰にも助けてもらえず、羊を食べられてしまった少年のエピソードである。ああいうことは、キツネザルでは起こらない。彼らだったら極端なケースとして、一〇〇万回「狼が来た」といわれても、やはり逃げることだろう。警戒音の認識にんしきに、音以外の手がかり※かゝりは介入しない。【5】、身の危険にかかわることだから、少々いかがわしい情報であっても、とりあえず信じた方が安全、という発想が働く。サルサルの理解の仕方は、柔軟性じゆうなんに欠けるのだ。

「柔軟性を欠く」と書くと、融通ゆうそうがきかず頭が悪いみたいに聞こえるかもしれない。しかしシグナルの記号としての意味作用に忠実であるという意味では、人間より抽象度ちゆうさうどの高い認識を行っていると言い換かえることもできなくはないのではないだろうか。

人間は、過去の経験にもとづいて、ことばの意味理解を変えていく。反対にこのことは発話を行う側も、常に相手に聞き入れてもらえるよう配慮はいりよして話をすることを意味している。そして、聞き手は相手がこちらを意識して話していることに気づいている以上、その意図を把握しつづ、発話内容を吟味ぎんみする。

考えてもみよう。「君は、よく勉強するね」といわれたにせよ、それが字面通りの誉めことばなのか、「勉強B」「ことへの皮肉なのかは、文字の配列から判断することは、不可能に近い。相手の顔色を読み、状況を斟酌し、あるいは話し手の普段ふだんの言行を参照しなくてはならない。

つまり言語理解というのは、意外なほど記号的でなくて、反対に相手の心を読む（発話を手がかりに心理を推測する）過程であることがわかる。むしろサルの方がよっぽどゲンミツに記号類別に依拠※いきよして情報伝達を行っているのだ。ところが、最近の日本人を観察してみると、そのコミュニケーション③はこの言語進化の進んできた方向を逆行しているように思えてならない。つまり、ことばのメッセージを常に記号として把握する傾向が高まっている。そして、そういう認識の仕方をサルが実行している以上、サルの方向へとコミュニケーションのスタイルを変えてきたという結論にたどりつくのだ。

- ※ 疎通……相手によく通じること。
- ※ 斟酌……相手の事情・心情をくみ取ること。
- ※ シンボル性の高い……約束事として一定の意味や内容を表す性質が強いということ。
- ※ 記号……ある対象や意味を指し示し、伝達するための文字・ことば・しるしなどの総称。
- ※ ひつきよう……いろいろあっても結局は。最終的には。
- ※ 淘汰圧……良いものを残し、悪いものを取りのぞこうとする力。
- ※ 介入……わりこんでかわること。
- ※ 依拠……よりどころとすること。

問1 ~~~~~1「周知」・2「おのずと」の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

1 周知		2 おのずと	
ア	多くの人々の知恵	ア	次第に
イ	広く知られること	イ	はつきりと
ウ	かわかって事情を知っていること	ウ	なんとなく
エ	しつかり理解すること	エ	自然に
オ	深い道理を知るすぐれた知恵	オ	相手に応じて

問2 A・B にあてはまる語句をそれぞれひらがな三字で答えなさい。

問3 1 ~ 5 にあてはまる語句として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 例えば イ すると ウ ところが エ それとも オ ともかく カ それどころか

問4 a ~ d にあてはまる語句として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間 イ 総合 ウ 積極 エ 進化 オ 否定 カ 記号

問5 ———①「それ」とありますが、何を指していますか。文中から二十字以内でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問6 ———②「『ことば』もどき」と同じ内容を指す表現を、この部分より前の文中から十字以上二十字以内でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問 7

③「この言語進化」の内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 本能的に「キヤー」とか「ワー」とか意味不明の語を発していただけの下等な段階から、情報伝達の方法の発達によって、様々な形態での情報伝達と受け取りが可能になったこと。
- イ 人類が霊長類から進化する過程でさまざまな文字や言語を習得したことによって、さまざまな単語の組み合わせや長い文章による複雑な意味内容の伝達と理解が可能になったこと。
- ウ 天敵が来た場合の危険を知らせる警戒音としてのシグナルをどちらかが一方的に発していただけの段階から、ことばを用いての人間同士の会話が日常的に成立するようになったこと。
- エ ことばのメッセージをどんな場合でも一定の意味を示すしとしてだけとらえていた段階から、記号の指示するものだけでは伝えきれない内容まで伝達し理解するようになったこと。
- オ 信頼性の低い情報であっても身の危険に関わるのでそのシグナルを受容していた段階から、情報処理能力が進化したことによって、より柔軟な情報伝達と取捨が可能になったこと。

問 8

|| a j のカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

建売住宅の工事が八棟とも全部終わったという報せがあったので、しばらくぶりで東京の東の郊外にある自分の家へ戻ってきた。仕事部屋は二階の西の隅にある。窓も西に向って開いていて、その窓の前の机にしがみついていて文章を紡ぎ出すのがわたしの生業である。窓の向うは畠だった。去年の秋、畠にブルドーザーが入り、やがて金槌の音がしはじめた。それも八棟分まとめて起つたので相当にやかましい。そこで柳橋にあるゲキ団事務所へ避難していたのである。

留守中に変事がおこっていた。ケンという名の雄の飼猫がカニの肉に毒を混ぜてこねた団子を喰って死んだのだ。そして当然のことだけれど仕事部屋の窓からの眺めも変った。畠のさらに向うが市所有の自然公園で、いつも春休みの頃には木々の枝が一斉に芽を吹いてぼうっと樺色に煙って見えたものだが、その、心がうきうきする景色は建売住宅の白壁にびしりとさえぎられてしまった。もっとも余得がないわけでもない。毎年、この季節には、どこから舞い込んでくるのか、こまかい砂ぼこりで机の上がサハラ砂漠になった。指先でサハラと書くとはつきりと読み取れるぐらい積もるのである。そこで春先は仕事の前に机の雑巾がけをするのが常だったが、畠がなくなつたせいで、何カ月も放っておいたのに机の木目が見えている。つまり一勝一敗、そう悪い変化ではなさそうである。それに夏は目の前の白壁があつた暑苦しい西日の前に立ちはだかつてくれるだろう。となるとこの変化はむしろよろこぶべきであるかもしれない。

夕闇に溶けて消えていく白壁を眺めながらそんなことを考えていると、壁の上部に穿たれた座布団ほどの大きな

さの屋根裏の高窓にちらと灯影が動いた。室内に職人が残って最後の仕上げに精を出しているのだろうか。とはいえ灯影の動いたのがほんの一瞬というのはおかしい。だれかが居残って仕事をしているのなら、高窓にずっと灯がうつっていてもよさそうなものだ。責任者かなんかが見回りにきたのだろうか。小さな疑問を抱いたまま窓を閉めて机に向った。

明け方、窓が白くなった。壁に当たった朝の陽光が仕事部屋の窓に照り返しているのである。これも畠が住宅になって生じた変化のひとつだろう。煙草の煙を追いつき出そうと思つて窓を開けた。深呼吸をふたつかみつつかから床につこうと窓近くへ身体を寄せたとき、建売住宅の縁側の雨戸が内側から静かに開いた。机の前に坐っているときは、二階の窓の上の白壁や屋根裏部屋の高窓ぐらいいしか見えないが、立つて身体を窓に寄せると、庭や縁先を見おろすことができるのである。

小学の高学年ぐらいの、西武ライオンズの野球帽を[※]あみだにかぶった男の子が、読売ジャイアンツの野球帽をかぶった小さな子の手を引いて庭におりた。ジャイアンツは小学の低学年といったところである。ライオンズはガラス戸と雨戸とを丁寧^{ていねい}に閉めた。二人とも背中に小さく細く縛り上げた布製の塊を背負っている。どうやら寝袋らしい。肩から斜めにさげているのは水筒だ。

「今日は登校日か」

③年かさの方のライオンズが目の下^{かなあみ}の金網の塀の前に立つた。

「どうするの」

ジャイアンツが並んでおしっこをはじめた。

「学校へ行くの」

「行ったらばれるぞ」

「そうだね。かあさんが学校へ電話しているよね」

※「筑波博へでもいくか」

「昨日も行ったじゃないか」

「でも、半分も見えていないんだぜ。いやか」

「行くよ」

「松戸駅まで歩くんだぞ」

「腹へるなあ」

「駅でなにか買ってやるよ」

「お金はまだあるよね」

「三万ちよつと」

「ぼくも二千円もっている」

二人は身体をゆすつてから門のある方へ歩いて行つた。門は建物の向う側にあつて、わたしの立っているところからは見えない。深呼吸するのも忘れて、わたしはしばらくのあいだぼんやりと庭を見おろしていた。

仕事部屋へ戻つたのは昼すぎである。以前は仕事部屋の隅に^{すみ}カニベッド^bをおいていたが、そこに寝^ねっ転^{ころ}がつて本を読みたいという誘惑と毎秒ごとにたたかうので疲れ果て、いまは寢室^{しんしつ}を別のところへ設けてある。机の前

に坐ろうとしてふと気になって、窓を細目に開けた。縁側に家族連れが腰をおろして握り飯を頬張っているのが見えた。家を見にやってきたらしい。ネクタイをきちんとしめた若い男が茶のお給仕をしている。これは建売会社の社員にちがいない。

「今のところは市川に出るにしても松戸に出るにしても不便でございすがね、間もなくこの近くに新線が敷かれることになっておりまして、しかもその新線は都営地下鉄につながります。そうなりますと、銀座まで三十五分か四十分で出られるんじゃないでしょうか。空気はよし、都心には近し、このへんはアナバでございます」

「でも千葉県というのがねえ」

ブルズンを粹に着こなした四十前後の男が云った。

「生れも育ちも世田谷なのでね、総武線だの常磐線だのというのに抵抗があるんだよな」

「千葉県もそのうちよくなると思いますよ」

建売会社の社員は知事のようなことを云った。

「いいピアノの先生がこの近くにいますかしら」

揃いのブルズンを着た女性が、仲よく並んで握り飯をたべていた女の子二人を見ながら云った。

「うちの子、二人ともピアノをやっているんですよ」

「わたしどもの会社で懇意にしている先生におねがいしてみましようか。近くに音楽大学で教えておいでの先生がお住みになっておりますから。海外のコンクールでニュウシヨウなこともおありだと聞いています」

「そう、じゃあおねがいしようかしら」

④「待てよ、家へ帰ってじっくり計算器を叩いてからきめようよ」

ひよつとするとピアノの音でなやまされるかもしれないな、と思いながら窓を閉め、机上の電話に手をのばした。警察署の保安課に知り合いの刑事さんがいたことを思い出してちよつと訊いてみようという気になったのである。

「お嬢さんがまた家出ですか」

わたしが名乗ると、刑事はやれやれといった調子で云った。女優の卵の次女が去年の夏二度つづけて家出をしたことがあって、刑事とはそのとき知り合った。

⑤「そうではないんですが、家出人についてすこしうかがいたいことがあって……。春休みは家出人が多いんですか」

「子どもの家出がふえますな」

「兄弟で家出したという届けはでていませんか」

「出ています。駅前の美容室の女主人が三日前の晩に署へかけこんできましたよ。彼女は未亡人です。ところが通いの、若い男の助手が夜になっても帰らなくなった……」

「つまり男と女の間柄になった？」

「そう。結婚することになった。それが二人にとってはおもしろくなかったらしい」

「なるほど」

「そこで店の売上げを五万円とちよつと掴んで家を出た。なにか心当りでもおありですか」

「じつは……」

と云いかけてそつと声をのんだ。自分にも家出の経験があったことを思い出したのだ。やはり春休みだった。弟としめし合せて収容されていた養しやう施設しせつを脱ぬけ出し、工事中の市営住宅に泊とまったことがある。近くに住んでいた人が勘かんづいて交番に連絡し、それで養しやう施設しせつに連れ戻されてしまった。なにが原因だったのか。いじめっ子に毎晩のように呼び出されて殴なぐられるのがいやになったのか、家が恋こいしくなったのか、あるいはほかの理由だったのか、もう三十何年も前のことですからすっかり忘れてしまった。ただ、何か訴うたえたいことがあったのはたしかだ。これだけは云っておきたい。だがそれを言葉で云い現したのでは弱すぎる。実際に動いてみせて、その意味を大人に汲くみ取とってもらいたい。そんなつもりがあつて脱走だつそうを企くわてたような気がする。だからひと晩で連れ戻されたときは口惜くしかった。いまから考えると、表現がまだ完結しないうちに連れ戻されたから、あんなに口惜くしかったのではないか。表現が完結すれば、それで気がすむのだ。諦あきらめがつくのである。

「じつは書きものの参考にしようと思っただけです。ありがとうございます」

「ほんとうにそれだけですか」

刑事がなかなか電話を切ろうとしないので、こっちのほうから送受器を置いた。

夜になって建売住宅から人氣が消え、入れかわつて猫たちがうろつきはじめた。畠はただった時分からそうなのである。近くの自然公園は子猫こねこの捨てばだ。子猫をもてあました人たちがつぎつぎに捨てて行く。だが捨てられた猫たちは注文通りに死んで行きはしない。近所のゴミ箱をあさつて育つて行く。猫好きの住人が、「飼かつてあげたいけど、うちにも二匹ひき、猫がいるのよ、ごめんなさいね」と云いながら餌えさをくれることも多い。このように野

良猫らねこでも、かといって飼かい猫でもないもののことを外猫というらしいが、このあたりにはその外猫が大勢いるのである。冬場はビニールハウスで寒さをしのいでいるらしい。

あの兄弟は今夜も目の前の建売住宅へやつてくるだろうか。それはわからないが、八時すぎに仕事部屋の灯あかりを消した。その方が入りやすいだろう。退屈たいくつしのぎに低く音楽をかけ、机の上に敷いた座布団にあぐらをかいた。もちろん窓は半分ばかり開けてある。仕事部屋の下は台所だが、その灯りはつけておいた。煙草を七、八本ほど煙にしたころ、聞き覚えのある声がした。

「明日はどこに行こうか」

「つくばへもう一回行こうか」

「いやだよ、遠いもの」

「じゃ、プロ野球のオープン戦にするか」

「さんせい」

台所から洩れた灯りが並んでおしっこをする二人をぼんやりと浮かびあがらせている。どこかで猫の甘あまったるい鳴き声がした。

「このへん猫が多いなあ」

「死んだ猫も多いよ。今朝だって三匹ひきいたもの」

「うん。猫って赤ちゃんみたいな声で鳴くだろ。どうしてか知っているか」

「人間に最初に飼われたのは犬なんだってさ。それを見て猫がうらやましがった。自分も人間に飼ってもらいた

くなった。そのためには人間に、あつ、かわいいな、と思わせなくちゃならないだろ」

「どうして」

「かわいいなとおもったら人間が飼ってくれるかもしれないじゃないか」

「あ、そうか」

「じゃ、人間が一番かわいいと思うのはなんだ」

「なんだろ」

「赤ちゃんだろ、人間が一番かわいいと思うものは。それで猫は人間の赤ちゃんのまねして鳴くようになったんだってさ」

兄は身体をゆすつてから雨戸に寄った。弟も身体をひとゆすりしてその後に従った。うまく雨戸が開いた。ガラス戸も開いた。だが、そのとき、だれかが庭に回ってきた。登山帽をかぶっている。手にビニールの袋をさげていた。顔はよく見えないが、その仕草はどうも若い男らしくない。いや、背をまるくしているし、ガニ股だし、相当の年のようだ。男は庭にしゃがむと、ビニールからなにか掴み出し、そのへんにひとつひとつ丁寧に置いてまわっている。金網の塀のそばにも三つばかり転がした。白っぽい塊だった。大きさはピンポン玉ぐらいだ。とつさにこの男が猫殺しだとびんときた。外猫はたしかに厄介者だが、それを毒団子で除くことはより厄介な事件になる。いっだったかラジオで動物アイゴ協会の人が、「毒団子で飼う猫が死ねば器物損壊罪になりますし、もし幼児が拾ってたべたりしたら、それこそ殺人罪まで行ってしまいます。毒団子をまいている人を見付けたら警察に知らせてください」と云っていた。おまけにうちの飼い猫ケンもこの男がまいた毒団子で殺され

ている。だから、「あんたはどこのだれだ」と怒鳴つてもよかつたのだが、それはできなかった。わたしが声を出すと、いま縁側の雨戸を開めることもならずにじっと息をひそめながら男が去るのを待っている兄弟に、こつちが前まえから見張っていたことを、さとられてしまうと思つたのである。こつちが黙っていれば、あの兄弟は男をやりすごすだけでいい。それだけで今夜の宿が確保できるだろう。

ところが声をあげたのは兄弟のほうだった。

⑨「今朝もずいぶん猫が死んでたけど、おじさんが下手人だったんだね」

「そんなことしちゃいけないんだぞ。学校の先生も云っていたもの。みなさん、どんなにうるさいと思つても毒団子で野良猫を退治しようとしてはなりませんって」

「なんだ、おまえたちは」

男は相手が子どもと知って立ちあがった。それまで腰を抜かして坐り込んでしまっていたのである。

「なんでそんなところにいるんだ。おまえたちがこの建売を買ったのか。そんなことはできないよな。となるとおまえたちは住居侵入罪をおかしていることになるよな。交番へ行こうか」

「いやだよ」

二人は左右に分れて縁側から飛び出し、門の方へ走り去った。わたしは男に声をかけた。

「団子を拾って消えてくれ。さもないと私が交番にお供するが……」

わたしの声がとげとげしていたとすれば、それは男のせいで兄弟がまた宿さがしをしなければならなくなったんじゃないかと腹を立てていたからだろう。もっとも、あくる日、男に感謝しなければならなかったことが起きた。

警察の保安課に電話すると、例の刑事がこう云ったのである。

「あなたの気になさっていた兄弟が昨夜おそく家へ戻りましたよ。今朝、母親と三人で挨拶にきました」

「それで、母親の再婚について二人はなにか云っていましたか」

「べつになにも。家出して胸の中がすっきりしたんじゃないんですか」

⑩「すると、つまり、表現が完結したわけだ」

「はあ……？」

「いや、いまのはこっちのひとりごとです。ありがとう」

ひよつとするとあの毒団子の男は、二人の兄弟のために、あるきっかけをつくってやったことになるのかもしれない。今度、団子を置きにあらわれたら二人にかわってお礼のひとつも云わなければならないと思っているのだが、男の姿はあれつきり見えないようである。

(井上ひさし『春休み』より)

※ あみだに……帽子などを後頭部に傾けてかぶること。

※ 筑波博……茨城県つくば市で80年代に開催された未来博覧会の名前。

※ 総武線だの常磐線だの……総武線は千葉県と東京西部を結ぶJR線、常磐線は上野駅と茨城県を結ぶJR線。

問1 Ⅱ a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 Ⅰ ①は「なりわい」、③は「としかさ」と読むが、その意味を表す二字熟語を、次の空欄に文中にある漢字を補い完成させなさい。

① () 業 () ③ 年 ()

問3 Ⅱ ②「つまり、一勝一敗」について、それぞれ「一勝」と「一敗」の状態を説明した次の文の空欄を補うのに適切な語句を、文中から指定された字数でぬき出して答えなさい。

「一勝」Ⅱ (1 一字) が (2 五字) のようであったのが、今は (3 八字) 状態。
「一敗」Ⅱ 春休み頃の (4 十字) が (5 二字) によってさえぎられた状態。

問4 Ⅲ ④で「ひよつとすると」と考えた理由として適切なものにはA、適切でないものにはBと書きなさい。

A 近くにピアノを音楽大学で教えている先生が住んでいるらしい。

I 握り飯を食べている女の子のうち一人がピアノを習っている。

U 四十前後の男は、このあたりに新線が敷かれるという情報を疑っている。

E 揃いのブルゾンを着た女性は、この建売住宅を買うことに乗り気である。

O 四十前後の男は、この土地が千葉県であるということに抵抗がある。

問5 ——— ⑤の会話文を受けて、「わたし」が一番、刑事に聞きたかった内容は何ですか。それが示された文中の会話文をぬき出さない。

問6 ——— ⑥と⑦のような状態にした「わたし」の気持ちを、二十字以内で説明しなさい。

問7 ——— ⑧のように「わたし」が行動するのはどんな気持ちからですか、二十字以内で説明しなさい。

問8 ——— ⑨のような声を上げたのは、兄弟が猫を人間に対してどのような存在だと思っていたからですか。その内容を三十字以内で説明しなさい。

問9 ——— ⑩の言葉の意味を、文中の内容に即して六十字以内で説明しなさい。

